
裏生徒会執行部！！

リオ・レウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏生徒会執行部！！

【Nコード】

N2077E

【作者名】

リオ・レウス

【あらすじ】

日々活動を続ける裏生徒会執行部。生徒の不満を静める仕事をする彼らは時として教師にも牙をむく！調査を進める執行部メンバーの前に新任教師の過去が明らかになる！

第1話

4時間目、音楽。

音楽はいけすかねえ。

何がヤダって？すべてが、だ。

別に楽器を奏でるのが嫌いなワケじゃない。
歌うのもそんなにキライじゃない。

あえて言おう。

原因は、先生だ。

どうも俺とは価値観がちげ…

とにかくダメなわけだ。

それに……

音楽の用意すべて忘れましたあ。

これで… 64回連続！！

記録更新ですな。

またあの怒声に頭をぶち抜かれるワケだがまあいい。

女の先生だから怖くない

ということだ音楽は俺の思いがまmanaのだ！
ハッハッハ！

キーンコーンカーンコーン…

キタア！チャイム！

これから死闘が始まるう…

チャイムが鳴り終わると同時に音楽室のドアが音を立てて開く。

「はい、おはよう。授業始めます。」

来たなバッドプレスババアBBBめ…

お前の説教、しかと受け止めてやろうぞ！！

自分にそう言い聞かせて、勇気を奮い立たす。

『全員、戦闘配備！これより俺はほんかんバッドプレスババアBBBとの抗戦に入る！』

俺の中の細胞すべてがバッドプレスババアBBBとの交戦に備えた。

今だ。宣戦布告！！！！

「せんせー、音楽の用意せーんぶ忘れましたあ」

俺は元気よく宣戦布告を述べた。

「また忘れかよ加山ー。リズム感卓球にも必要だろー！？」

周りのクラスメイトが揚げ足をとる。

よけいなお世話だ！音楽なんて消えちまえ！部活動は関係ないだろうが！！

心の中で愚痴りながらもバッドプレスババアBBBの反撃に備えて耳をふさぐ。

バッドプレスババア今日はついでに目もつぶってやろう。

BBBへの挑発もかねて、目もつむった。

.....

.....

.....

あれ？何も聞こえないぞ？
俺はゆっくりと目を開けた。

「！！！！」

なんじゃこりゃ！

目の前にいたのはBBBではなかった。

.

そこにいたのは…妙に威圧感のある男。

「だ、誰だデメエ！！」

俺はすっかり気が動転、おもわず荒い口調で叫んでしまった。

「新任の矢崎だ。よろしく」

「ハアアア!?!」

マジか? まじか? マジですか? ?

俺の中の音楽の授業が音を立てて崩れ落ちた。

キーンコーンカーンコーン…

授業の終わりのチャイムがなった。

… やつと終わった…

音楽室から出た瞬間、大きなため息がもれた。

もう最悪。今までつけてきた授業の中で一番最悪。

あの矢崎とかいう教師、ホントに教員免許もってんのか? ?

てか、あれはホントに授業なのか?

ほぼ雑談じゃね? か。

いきなり楽譜を配って、この音符はオタマジャクシに見えるだの、

この音符はピアノのけん盤だの、しまいには自分が若かった頃の自慢話。

ったく、あんな授業つまんねえ！！

ふざけんのも大概にしろ！！

B B B 以上にむかつく。

もうあんなヤツ消えちまえ！

…でもこんな事、口が裂けても言えねえ。

だってあの人怖いんだもん。

雰囲気があるでヤクザだもん。

俺は階段を一気に駆け上がった。

腹いせに、午後の授業は屋上でさぼってやる！

屋上に続くドアを蹴り飛ばして開ける。

「こんにちわ、加山君。」

ドアが開いたと同時に男性の声が耳に飛び込んできた。

いきなり名前を呼ばれた俺は一瞬とまどった。

屋上には普通、生徒はいないはず。

だとしたらこの声の主はだれだ？

そこには眼鏡をかけた男子生徒がいた。

歳は…俺よりも上だろうか？下ではなさそうだ。

「初めまして加山君。そしてようこそ裏生徒会執行部へ。」

メガネの生徒が改まった口調で言った。

裏…生徒会！？

第1話（後書き）

裏生徒会執行部とはいったい何なのか？
第二話に続く！！

第2話

裏生徒会？

なんだよそれ…

よく見ると眼鏡の生徒の後ろにも何人かの生徒が控えている。
性別は分らないが、4人ぐらいだろうか。

「君は新任の矢崎に不満を抱いている、そうだな？」

眼鏡の生徒がいきなり切り出した。

隣には起動しているノートパソコンが開かれていた。

「！！！？？」

なんか腹立つな、この眼鏡。

それがなんだってんだ。

するとメガネの後ろから長身の男子生徒が出てきた。

キリッとした顔立ちが印象的な生徒だ。

でもやつぱ怪しいだろ、コイツら。

「そんな顔をするな。僕たち裏生徒会執行部は一種のサークルととらえてもらって構わない。活動内容は主に生徒達の不満を静める事をしている。」

メガネは分らないが、この男子生徒の学生服についているネームプレートには『赤西亮^{あかにしりょう}』という名前が刻んであった。

それにしても…静める？…どういう意味だ？

…静めるって、どうやって静めるんだ？

そもそも裏生徒会執行部など聞いたことがない。

一体こいつらは何者なんだ？

「一言で言ってやろう。」

野太い声。

赤西の背後から不良のような金髪の男子生徒が出てきた。

「この赤西さんがテメエの不満をはらしてやろうって話だ。分かるか？」

ケンカ口調でいきなり話しかけるモンだから、思わずむっとしてしまふ。

ギタギタにしてやろうか？

「こらこら、客は丁重に扱えと言っているだろう？」

ぴりぴりした空気を感じ取った赤西がとっさにいさめた。
しっかりしてるな赤西^{コイツ}。

「で、何か質問はあるかな？」

赤西が仕切り直す。

……質問で、、

「まずお前ら何もんだ？まず名を名のれよ。失礼だが。」

皮肉モード全開！！

金髪ヤローが顔をしかめた。

ハッハッハ！参ったか金髪ヤロー！！

心の中でいっぱいののしつてみた。

「失礼。僕の名前は赤西亮だ。」

赤西が紹介を始めた。

そんなの知ってるし！

「そしてこの眼鏡が飯田。眼鏡とでも呼んでくれ。」

眼鏡が赤西をにらみつけた。
いいだ

ぎらりと光が眼鏡のレンズに反射した。

が、赤西は飯田のにらみを無視して紹介を続ける。

「で、こっちの金髪が高見裕也。あだ名はキンちゃん、だ。」

高見は俺のことをぎらりとにらんでいる。

調子こきやがって。

にらみ殺すぞ？

「で、最後にこの女の子が中村さん。」

見かけは相当カワイイ。

ヤッベ惚れたかも…

俺が見とれていると中村が口を開いた。

「何見てんのよ。アンタの家に盗みに入るわよ!？」

怖!!

怖いよ中村さん!!

しかもあの目!

狩人の目だよ。

ヤバそうだよ。殺気むき出しだよ。

「ちなみに中村さんはピッキングのプロだよ。気をつけてね。」

えええ…

まじかよ。

ホントに家に盗みに来るかもしれねーじゃん…

コワ!!!

「さて本題に戻ろう。もう一度確認をする。君は新任の矢崎に不満を持っているね?」

「ああ。でもそんな不満静めようがないだろ?知ったところでどうしようって言うんだ?」

確かに俺は矢崎に不満を持っている。でもそんなの認めるしかないじゃないか。

全部受け入れるしかないじゃん?

それ以外の道なんてない。

実現不可能。

あんたらの出る幕はないっちゅうの！

「それだけ確認できればダイジヨブだ。期待していてくれ。」

そう言い残して赤西達は屋上から出て行った。

.....

一気に屋上に静寂が戻った。

前に来たとき（前にすねてここ来た時）と同じように。
落ち着くなぁ。

..... なんだっ たんだろ...アレ...

第2話（後書き）

なんか個性的な集団だが、ダイジョブなのか！？
一体何をする事やら……

第3話

朝。

教室に入るとクラスメイトの視線が俺に集中した。
皆、何か言いたそうな顔をしている。

「おい。加山ー!!」

城田しんたがかけてきた。

いわゆる親友というヤツだろうか、コイツとはいつもつまくやっている。

しかし、なんだこの満面の笑みは…

城田らしくない。

嫌な予感…

「すげえぞお前。やるな!」

「何が!? 何がだよ!?!」

「おま、お前マジすげえよ!」

「だから何が!? 落ち着けよ!」

なんだこの興奮ぶりは…

「中村さん知ってるだろ? 中村さんがさ…」

ん? 中村? 誰だ? それ

「ちょっと待った。中村って誰だ？」

「えええ…中村さん知らないのかよ…」

城田が中村の説明をし始めた。

「どんだけ詳しいんだよ、…、と思いながらも城田の話聞く俺。
話の内容はこんな感じ。」

なかむらやゆい
中村八唯。

3年2組の女子生徒で、学年一の美女(?)らしい。
なんかかなりファンがいるらしくて、(ちょっとひく)女子の間
でもあこがれの的らしい。

そんなの今の今まで知らなかったよ、俺。
誰か教えてくれたってよかったじゃん。

「でさ、その中村さんが朝、このクラスに来たんだよ！」

ふん。

だからなに？みたいな？

このクラスは3年5組でソイツのクラスとは離れてるけどさ、別に
めずらしい事じゃなくね？？

「で、お前の机の上に手紙をおいてった。」

.....

「へ？」

「お前に手紙を渡してくれって。ハイ、これ」

.....

城田は手紙を差し出した。

なんかかなり渡したくなさそうな顔…そしてうらやましそうな目。
こりゃホンモノだな…

俺は手紙を開けた。

クラスメイトの視線が重い。

えっと、何々……

加山へ

加山、打ち合わせがあるから今日の朝、アタシの教室にきな。
なるべく早く来てね。

裏執行部：中村より

..... あれ？

中村って…裏生徒会執行部の！？

あのピッキングの天才とかいう女子生徒の！？

あの中村か？？

まじかよ！

喜んでいいの!?

これ喜んでいいのかな?

正直……

メツチャコワイ!!

まあいいや。

とにかく行ってみよう。

えっと何組だっけ??

城田にそれだけ確認して俺は教室を出た。

クラスメイト

皆がしきりに騒ぎ立てるが無視。

俺は急いでんだ。

授業がはじまっちゃう。

3組の教室の前を通過した頃、授業の開始チャイムがなった。

結構遠いんだよね、2組って…

あの角を曲がれば2組の教室。

角を曲がった。

と同時に中村の姿が視界に入る。

やべ、改めてみるとカワイイ。

「遅い!授業始まっちゃったじゃないの!-!」

なんか屋上の時と雰囲気違うな。
惚れたかも。

「とにかく屋上行きましょ。」

中村は強引に俺の腕をつかんで引っ張った。
すげえ力。

腕折れそう…

「早く！」

言葉には茶目っ気があって和むが、目は殺気にあふれている。

こええ…

そのまま俺は屋上まで連行された。

屋上。

一時間目終了のチャイムがなった。

俺が屋上に着いた時には前回のメンツがそろっていた。
めがね
飯田がなにやらパソコンをいじっている。

「何かつかめた？」

中村が赤西に聞いた。

「それが、何も分からないんだ。でも何もつかめないトコがまた怪しい。」

赤西が不満そうに言った。

一体裏生徒会執行部は何をやってるんだ！？

赤西は俺の疑問に気づいたのか、説明してくれた。

「矢崎の過去について洗ってるんだよ。」

「え？」

.....

マジこいつら何者？？

まるでどっかの特殊部隊だろ...

第4話

「あつた！発見したぞ！矢崎の過去！」

いきなり飯田^{めがね}が叫んだ。

半分寝ていた俺はビクツとして起きあがる。
何時間ぐらいたっただろうか？
かなりの時間、ここにいたような気がする。

「何が分かったんだ？」

赤西が瞬時に飛んできて聞いた。

アンタ起きてたのか…
すげえな…

「矢崎の過去です。矢崎は6年前に整形しています！」

「なに??」

だからなんだってんだよ…
べつにいいだろ。

大体過去なんて洗ってどうすんだよ。

「よし、じゃあ矢崎はなぜ整形したのか、調べてくれ。」

赤西が早口で飯田^{めがね}にそう指示した。

だからなんで過去？？
もういいや聞こう。

「何で過去なんてしらべんだよ？意味なくね？」

「過去を調べれば、相手がどういう人間なのか分かる。これから戦う相手は知る必要があるだろ。それだけだ。」

俺は赤西の単純明快な返答に納得した。
相手の弱みを握るワケか…

……とその時、いきなり校内放送が入った。

『えゝ今から呼び出す生徒は今すぐ職員室まで来なさい。』

この声…矢崎じゃねえか。

『中村、加山、高見、今すぐ職員室まで来なさい。』

おれ？？

ヤバ！授業さぼりすぎたんだ！！
思えば、もう3時間目の中盤あたりだろう。

「今日はお開きだ。皆、各教室に戻れ。」

赤西が早口に指示して足早に下の階に歩いていった。
それに続き飯田^{めがね}が後を追う。

高見も一回舌打ちをして機嫌悪そうに歩いていった。

俺と中村が残った。

中村は立ち止まって俺の方を振り向いた。

「行くわよ。先生の巣窟^{せんくう}へ。」

はは、つまんねえジョークだ。

俺は苦笑を浮かべながらも中村の後にくっついていった。

職員室。

先に高見が来ていた。

高見の前には矢崎。

お互いににらみ合っている。

そこでは静かなる激闘が繰り広げられていた。

「お前ら今まで何やっていたんだ！」

俺と中村が視界に入った瞬間、矢崎は怒鳴り声を上げた。

あれ？思ってたより迫力ないな。

こんなもんかよ。

「授業を4時間もサボるヤツがあるか！特にお前！」

矢崎は高見を指さした。

「お前らは帰ってよし。」

俺と中村にそう言つて矢崎^{ヤツ}は高見をつかんだ。

「ちょっと来い、高見。」

矢崎は高見をつかんでドアを思い切り開けた。

「んだよテメエ！」

高見はキレてドアを蹴飛ばした。

しかし、矢崎は高見を引っ張り連れて行ってしまった。

ハハッ

いいぞまだ。

ワルぶるからイケナイのだよタカちゃん！

心の中で高見を小馬鹿にして、俺は職員室を出た。

職員室を出るなり、いきなり中村が俺をつかんだ。

「怪しまれないようにアタシとアンタは付き合っていることにするわよ。」

「へ？」

「物わかりの悪い男ね。まあそういうことだから。じゃあね。」

中村はそう言い残して自分の教室に向かって走っていった。

付き合う……

俺が……ね……

まああの目はまだ殺気残ってたし、本気で付き合っんじゃないだろ。
フェイクの付き合いか…

ヤベ、なんかスパイ映画みたい。
乗ってきたゼイ!!!

第5話

夕方。

時刻は6：00。

もう空は薄暗く、校庭では運動部が片づけをしている。

そんな中、3 - 1の教室には一人の生徒がいた。

その生徒は校内にもかかわらず堂々とノートパソコンを広げている。

飯田雄太。

通称メガネ。

裏生徒会執行部の参謀ともいえる人物。

今回、飯田^{メガネ}は加山とかいう奴の依頼で教師の経歴を洗っている。

飯田が下調べをしたうえで、高見^{キンちゃん}や赤西さんが行動に移す。

最終的には目標^{ターゲット}を震え上がらせればいいだけ。

しかしそれらの行動を実行するには入念な下調べが必要。
だからこの仕事はかなり重要になってくる。

そして今回の獲物^{ターゲット}は…

新任の教師、矢崎。

コイツは6年前、整形をしている。
なぜだ？

飯田の頭にはその疑問がずっとつきまとっていた。

まあそんなこと考えてもしょうがない。

今は目の前にある事を一つ一つかたずけていくだけだ。

しかし飯田は正直、その理由にたどり着く自信があった。
最終的にはその答えにたどり着けるだろう。

この件はおもしろいことになりそうな予感がする。

キーボードをたたく手に汗がにじむ。

ピーピーピーピー

パソコンから電子音になった。

よっしゃ、ビンゴ。

画面に出てきたのは顔写真と経歴が載っているリスト。

6年前に整形した客のリストだ。

飯田は素早くリストをスクロールする。

この中に矢崎がいるハズだ。

飯田は高鳴る鼓動を抑えながら一つ一つリストを見ていった。

「……」

ふと飯田は一人の客のページで動きを止めた。
画面に映った顔写真。

矢崎の面影が見て取れる。

おそらくこの人物が矢崎の整形前の顔だろう。

経歴の詳細についても一応見てみたが、どうやら矢崎のそれと一致する。

コイツが6年前の矢崎…

しかしその客の名前の蘭には違う名前があった。

小岩浩二。

矢崎じゃない。

まあいい。たぶんコイツが矢崎の正体だ。

矢崎は偽名だろう。

小岩浩二。今度はコイツを調べるか。

どんな過去が出てくるか…

もうひと調べいこうかと意気込んだがもう時間だ。

時計は6：40を指していた。

後は家に帰ってからするか…

飯田はパソコンをバックにしまつと立ち上がり教室を出た。

第5話（後書き）

次回、思わぬ展開へ！
高見に危機迫る！？

第6話

昼頃。

各教室は給食の時間で生徒の声が騒がしい。

そんな中、高見は新任の矢崎に連行されていた。
何度か矢崎の手を振り払おうとしたが矢崎コイツの手はなぜか離れない。
かなりの力だ。

しょうがない、高見は矢崎に聞こえるように悪態をつきながら引つ
張られるしかなかった。

「んのヤロ…オイ、どこにつれてく気だ？」

高見は強気で聞いた。

二人は今、3階に続く階段をのぼっていた。
どこへ行くか、全く見当がつかない。

しかし、矢崎は高見の問いに対してなんの反応も見せない。
ただただ無言で階段を上る。

おかしい…

なんだこの違和感は…

高見はこのとき矢崎から違和感を感じ取っていた。
何も確証があるわけではないが、嫌な予感がしていた。

ついに3階に来た。

ここまで来ると、教室からもれてくる生徒の声も聞こえない。妙な静けさが二人を包む。

歩く方向からしてどうやら音楽室に向かっているようだ。

しかし、音楽室にいつてなにをするんだ？

説教なら職員室でやってもよかったハズだ。

高見はだんだん不安になってきた。

「オイ、どこ行くのかって聞いてんだよ！聞こえネエのか？」

しかし、相変わらず矢崎は無表情で何も答えない。

……なんか、気味が悪い。

矢崎はそのまま高見の手を引いて音楽室のドアを勢いよく開けた。

しかし、彼はそこで止まらず、音楽室のさらに奥の準備室に入った。

入るが否や、矢崎は準備室のドアを勢いよく閉め、鍵をかけた。

「さて、お仕置きの時間だ。」

矢崎は低い声でそう言うのと着ているジャージのポケットから銀色の物体を取り出した。

白く光る物体。

ナイフ。

矢崎は狂った笑みを浮かべナイフをなめた。

矢崎^{コイツ}ついに狂いやがったか？…

高見は苦笑を浮かべながら矢崎に殴りかかった。

6：50。

飯田は小岩^{コイツ}浩二なる人物の過去を調べていた。
どこかで聞いたような名前だ…

検索はものの15秒程度ですんだ。
何しろ条件が絞られている。
妥当な時間だろう。

画面に映った検索結果を見た瞬間、飯田の顔色が変わった。
コイツは…コイツは指名手配中の犯罪者じゃないか！！

さらに飯田は驚きで一瞬動きが止まった。

しかも小岩^{コイツ}が起こした事件…
下の方にある、その人物についての備考欄。

犯行内容：6年前、高見家に侵入、高見涼子を殺害。

動機は涼子の夫、和志への恨みが原因と見られる。

高見和志は暴力団の幹部で小岩との面識もあったようだ。

涼子を殺害後、小岩はその場を逃げた。
逃げた時の、目撃情報もあった。

そして最後の文にはこう書かれていた。

【小岩は未だに逃走中。目撃情報も出ないため、整形あるいは国外へ逃亡したものと思われる。】

なんてこった！

矢崎は殺人犯だ！

高見が危ない！！

たしか高見はあの後、矢崎にどこかへ連れて行かれた。

6年前の事件の被害者である高見涼子。
そして、その子供は高見^{キンちゃん}だ。

矢崎の正体を知ったら、高見^{キンちゃん}は何をするか分からない。

とにかく助けにいかなくては！

飯田は急いで赤西に電話をかけ事情を説明ご、急いで家を飛び出した。

第6話（後書き）

次回：勢いよく家を飛び出した飯田。果たしてどうなるのか!？

第7話

もう外は暗い。

でも冬に比べて、ずいぶん日が落ちるのが遅くなった。

かすかだが下の階から夕飯のにおいがする。

さて、夕食の前に少し勉強でもするか。

加山^{オレ}は机に向かい英語のノートを開く。

そついや俺達が職員室に呼ばれた後、高見^{アイツ}が矢崎に連行されてたけど……

結局あの後どうなったんだ？

もしか気付かれたか？

「……………」

なんかいろいろ考えてたら頭痛くなってきた。

…そつだ、気分転換にコンビニにでも行ってくっか。

俺は財布をポケットに入れて自室^{ぐや}を出た。

「どこ行くの？」

玄関へ向かう途中、母親が尋ねてきた。

「ちょっと散歩。」

それだけ告げて家を出た。

外は涼しかった。

さすが5月、この寒すぎない涼しさが妙に心地いいいね、やっぱり夜はキモチー…

そのとき、俺の目に人影が映った。

50mくらい先、電灯の下を誰かが走っている。

…あれは…飯田！？^{メガネ}

電灯の下を走り抜けて行ったのは裏生徒会執行部の飯田だった。

何で飯田^{メガネ}が？

そう思ったが、どうもあの形相は尋常じゃない。
おそらく何かあったんだ。

…よし、後をつけよう。

俺は全速力でいいだの後を追った。

飯田は全速力で走っていた。

高見と矢崎は学校だ！

赤西さんに連絡した後、一応高見の家にも連絡を入れた。
結果、高見は家に帰っていないかった。

ということは、まだ高見は学校アイツにいる事になる。

時計を見た。

7：40。

もう下校時間から数時間が過ぎている。
頼む、間に合ってくれ。

やっと学校が見えてきた。

第7話（後書き）

次回：果たして高見は無事なのか？

第8話

高見は目を覚ました。

夜？だろうか。

時計を見ると、すでに8時前。

窓から見える外の景色は真っ暗な闇だけ。

痛ッ！

起きあがろうとした高見の頭に激痛が走る。
手を後頭部に回すと大きく腫れ上がり血が出ていた。

…そうだ、俺、矢崎にやられたのか。

そのとき、となりの音楽室の電気がついた。
だんだん足音が近づいてくる。

高見は手探りで辺りをかき回し、武器になるような物を探す。
あった。これは…譜面代か。

足音はどんどん近づいてくる。
高見は譜面代を構えた。

と、準備室のドアが勢いよく開いた。

それと同時に高見は勢いよく譜面代を振り下ろした。

ガシャン！

譜面代が床におもいつきりぶつかった。

チツ、はずしたか。

高見はもう一度譜面代を構えなおし、振り上げる。
くそ矢崎！死ねえ！

「待て待て待て。俺だ、赤西だ。」

高見が譜面代を振り下ろそうとした瞬間、聞き覚えのある声が響いた。

え？赤西さん？

目の前には赤西が立っていた。

高見は譜面代をおろした。
赤西さん？何でここに？

「とにかく逃げるぞ！話は後だ。」

「よし。逃げましょう。」

高見はそう言って立ち上がった。
が、またもや後頭部に激痛。
膝をついてしまった。

「オイ、だいじょぶか？」

赤西が心配そうに高見の顔をのぞき込んだ。

くそ、立てねえ……

すると廊下から人の歩く足音が聞こえてきた。

コツ、コツ、コツ、コツ

一瞬で赤西の表情が陰しくなった。

この足音の主は矢崎。

何となくだが、分かる。

ここへ向かってきているのは、矢崎。

音楽室の電気はついたままだ。

これでは見つかる。

「隠れるぞ。」

赤西はそう合図して、高見を引っ張り、楽器が置いてある所の裏に隠れた。

足音はどんどん大きくなってくる。

そしてその足音は音楽室のドアの前で止まった。

少し間をおいてドアがゆっくりと静かに開く。

「……隠れても無駄だ。出てこい。」

矢崎の声。もう見つかったる？

赤西は楽器の影から矢崎を見た。

矢崎は周りを警戒しながら準備室の方へ歩いている。

まだ見つかったてはいないか。
よし…こうなったら…

「ここでじつとしてる。分かったな？」

赤西はいきなり高見にそう告げて、隠れている楽器の裏から飛び出した。

「こつちだ！矢崎！」

赤西は大きく叫び、廊下へ走る。

矢崎はその声に気付き、廊下側に視線を移す。

赤西さん…ケガして走れない俺のために陽動を？
そうやってアンタはいつも人をかばう。

前にもこんな事があった。

それが裏生徒会執行部に入るきっかけになった。
赤西はいつも真っ直ぐだ。

矢崎は携帯をとりだした。

素早く誰かに電話をかけた。

「俺だ、矢崎だ。どうやら邪魔が入ったようだ。先回りして始末しろ。」

それだけ言うと矢崎は赤西の後を追って走っていった。

矢崎が出て行ったのを見計らって高見は物陰からでた。

大変だ。矢崎^{ヤツ}には仲間がいたんだ！

高見も赤西と矢崎の後を追おうとした。

そのとき、音楽室の正面の廊下から懐中電灯の光が見えた。

はっ！

身を隠そうとしたときにはもう遅かった。

懐中電灯はきつちりと高見をとらえていた。

……クソッ！今日はなんて運が悪いんだ！？

第9話

加山は自分の通っている中学校、東浜中学校の校門の前に立っていた。

先に走っていった飯田メガネの後を追ってここまで来た。
飯田メガネの慌て方からして学校で何かあったのだろう。
ここまで追ってきただけの事件ことはありそうだ。
もしかしたらおもしろいモノが見られるかもしれない。

そんな期待を胸に、加山は校門から敷地内に入った。

怪しまれるから飯田には気付かれないようにしないと…
いろいろ説明すんのメンドいしな。
それに見つかったら、まるで俺がストーカーみたいに思われちゃう。

…とその時、

「加山！何でいるんだ！？」

え…

靴箱の前に飯田が立っていた。
飯田は真っ直ぐ加山をとらえていた。

…さっそく見つかった…

しょうがない。

加山は何で学校こいにいるのかをすべて話した。

加山と飯田は一緒に廊下を歩いていた。

飯田の話だと…前半の部分は難しく理解できなかったが、まあ高見が危ないらしいことは分かった。

まあ高見を助けたとは思わないが、矢崎のやつも氣にくわない。仕方ない、矢崎をたおすという理由の元で出向いてやるか。

しかし暗いな。

懐中電灯があるからかうじて足下くらいは見える。

懐中電灯がなかったら危なっかしくて歩けない。

「不気味だな…」

飯田がそんなことをつぶやいている。

確かに昼間と違って夜の学校は不気味だ。

いつもより廊下が長く感じられる。

飯田がいなければ普通に歩いてなどいられないだろう。

ホントに高見はまだこの校舎にいるのだろうか。

人氣がない、静かすぎる。

……ガッシャーン！

突然、静寂を破り何かが床にぶち当たる音がした。

「なんだ！？この音！？」

急に恐怖がわいてきた。

突然の衝撃音。

突然すぎたその音は、俺の恐怖心をあおりたてた。

コワイ。

コワイ、コワイ、コワイ。

「上だ！行ってみよう。」

飯田が冷静に言った。

しょうがない。行くしかなさそうだ。

二人は一番近い階段までダッシュした。

3階。

飯田と加山は慎重に階段をのぼっていた。

音の方角と大きさからして、あの音は3階から聞こえた。
つまり、近くに矢崎^{てき}がいてもおかしくない。

慎重に…慎重に…

階段をのぼりきったところで、辺りを懐中電灯で照らす。

!!

音楽室の電気がついている。

誰かいるのか!?

そしてドアの前には人影がある。

誰だ?暗くてよく見えない。

その人影を懐中電灯で照らす。

灯りを足からどんだん上に移す。

「た、高見!？」

加山と飯田は声をそろえて言葉を口にしていた。

そこに立っていたのは高見裕也、自分たちが救出しにきた本人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2077e/>

裏生徒会執行部！！

2010年10月14日13時57分発行